

第十九回吟遊同人総会報告

The 19th Ginyu Haiku Meeting Report

Ichitaro YAMAMOTO

山本 一太郎

二〇一六年八月二七日（土）午後二時から、板橋区立グリーンホール五〇一号室において、第一九回吟遊同人総会が開催された。参加者は、埼玉、東京、千葉、神奈川などのほか、愛媛からも二名が参加。吟遊俳句賞二〇一六を受賞された伊丹三樹彦氏の代理として、令嬢の伊丹啓子さんも出席された。

夏石番矢代表の挨拶の後、出席者の自己紹介が続いた。初参加は一九歳の大学生、福岡日向子と語学堪能な長谷川破笑。続いての編集報告では、夏石代表から、「吟遊」に掲載する評論が少ないことについて言及があった。海外では、古典俳句を知っている人も現代俳句を知っている人は少ないので、評論が求められている。同人ではない会友のエッセイも歓迎とのこと。

次いで会計担当の鎌倉佐弓から会計報告が行われた。会計は余裕があるようにも見えるが、二〇一八年に予定している吟遊創刊二〇周年イベントに関して、某社から提案があり、実行される見込みことになったことも発表。

合評は「吟遊」第六八号から第七一号の作品について。最初に、石倉秀樹が山岸竜治と鎌倉佐弓の句についてコメント。

山岸竜治の俳句（評者＝石倉秀樹）

弱い者の味方だと感じる。怒ったり、皮肉を言ったり、遊んだり。遊びの句もある。第七〇号の「恋人のように老人春を待つ」はよくわかる。山岸さんもそういう年になったということか。七一号の「ムズカシイ話はキライかき氷」はイ音の連続が軽快で楽しい。「風鈴やベッドに垂れし君の手や」の「や」は切れ字ではなく列挙の「や」か。切れ字の「や」信仰へのからかいが感じられる。

夏石 選句によって印象が変わる。いい選句。

鎌倉佐弓の俳句（評者＝石倉秀樹）

普通の俳句は、「俳人詠んで曰く」だが、鎌倉の句は、「俳人聴いて曰く」。事物を読むのではなく、事物の声を聴き、人間に伝えようと詠む。通常は俳人が主で、主体性をもって言う。鎌倉はそうではない句がある。

第六八号の「かき氷天を一周して水に」は、水の循環を詠んでいる。散文では、「水天を一周してかき氷に」だが、その論理を倒置したところに詩が生まれる。第七〇号では「肩へ木枯『ずっと吹いてきたんだよ』」。まさに事物が語っている。鎌倉はそれを聴いて書いている。

第七一号、「暖かくなろう釘が針をさそった」。ここでは、釘も針も人間なのだろう。金属で冷たいものに対して暖かさが対比としてあって、対比があるということは漢詩に近い対句の仕組み。

たかはし 語順の入れ替えが柔軟。

福岡 口語が多い。女性らしい、やさしい印象。

夏石 間接話法的。名詞+助詞+動詞ではなく、細かく小さく奇妙な感じ。

続いて鎌倉佐弓から大里満紀と福岡日向子女性二人の句について。

大里満紀の俳句（評者＝鎌倉佐弓）

第六九号「観覧車大空回して秋に入る」。気持ちのいい句。読みにくいので、「大空」を「おおぞら」にしてもいい。第七一号「老犬の背の張りピンと夏に入る」。ほのぼのとした味わいが大里さんの持ち味か。暮らしを見つめる眼差しからも俳句は生まれる。方向性は間違っていないと思うので、自信を持って、悩みつつ、進んでほしい。

古田 読む人に喜びを伝えることができています。

夏石 選句がいいのか、高度な句に見える。

福岡日向子の俳句（評者＝鎌倉佐弓）

第六八号「線香花火おちるときの背徳」。言葉への逡巡が少ない。その思い切りの良さが出ている。「背徳」を見つけた凄さ。第六九号「海底の味残したる西瓜かな」。西瓜の食感を「海底の味」とした。その感性に共感。第七〇号「十二月を夜の象の大移動のように」。十二月の過ぎていく速さの捉え方が、比喩の表し方が独特。第七〇号「鎌鼬男に必ずある自由」。男という存在にあるあやうさを感じる。それに気づく作者はすごく大人？ 第七一号「卒業の君に拓ける海ひとつ」。船乗りになるのではないが、海の近くで海を感じて生きているよさが出た。

長谷川 しっかりとすなおにスパッと。どうしても自分はぐちゃぐちゃしてしまう。

夏石 一句一句に軸がある。旧俳壇はこちょこちょ小器用な句が多い。今、芯がない人が多い。「鎌鼬」の俳句を十代で書けるのはすごい。

たかはししずみの俳句（評者＝大里満紀）

全体を通して、定型にとらわれない自由な作風に大きな特色がある。第六八号「腕伸ばすように水走らせるように九月」。暑く重苦しい夏が過ぎ、さわやかな秋を迎えた喜びが感じられる。解放感・爽快感をもって迎えた九月。伸びやかな感情が生き生きと描かれている。第六九号「余命を知り青じゃないのに青で描く」。幾ばくもない余命を知って、受け入れられない気持ちが表れている。話し言葉が効果的。第七一号「悲しくてすっぴんのアメ玉を口に」。アメ玉は希望か。化粧する気も起きない程、悲しみに打ちひしがれている作者。そんな精神状態の中で、ふと口にしたアメ玉。この後、作者は徐々に元気を取り戻していったのではないかと想像される。

夏石 「すっぴんの」よりも「すっぴんで」のほうがいい。以前は統合できないところがあったがよくなった。レクイエムを書けなければ詩人ではない。

石倉秀樹の俳句（評者＝長谷川破笑）

第六八号「秋蟬ノ無駄ニ噪ゲル芸ノ苑」。漢俳（漢字一七音）から嘆歌（漢字一〇字＝三・四・三）まで漢字一七字から一〇字にいたるものを段階的に八首並べ、その読み下し文を俳句に置き換えている。各号にテーマを持って取り組まれていることがよくわかる。詩の重要なこと、詠んでいる対象は何か？ 老い、回顧、酒。艶もあるかもしれない。さまざまな漢詩型で俳句への変換を試行されるアプローチは変わらないが、詠む対象も変わらない。ここに氏の詩人としての思いが入っているように思える。

漢詩の定型の多様さを提示することにより、日本詩歌のかたくなな定型へのこだわりを打破している。

石倉 五七五は、韻律や定型と言うには貧しい。中国語の詩はもっと形式が多様。

山本一太朗の俳句（評者＝たかはししずみ）

句の特徴として、助詞の「の」が多い。七〇号の句にはすべて助詞の「の」が入っている。全体的に、自然とシンクロさせながらゆらぎを感じる句が多い。季語を使うときは慎重が必要。

鎌倉 調子のいい時とわるい時がはっきりしている。

夏石 第七一号「白夜まだ彼の名前を聞いていない」が卓抜。

古田嘉彦の俳句（評者＝夏石番矢）

計算に計算を重ねて作っている。第七〇号「信じがたいほど多くの足跡売る屋台」。ありえないけど、ありえると思わせる力量。「足跡」の発見がおもしろい。第七一号「一縫う一の秘密は回転する鶴」。第七一号「一みなぎる一から出た毛根が探す海」。全角のハイフンが、最近俳句に出てきた。何なのだろうか。無言？ 発声しないけど記号と時間・空間がある。

長谷川破笑の俳句（評者＝夏石番矢）

第七一号「屋根の上のビニールシートの上の空」。同号「家々の食卓見えるスーパーのレジ」。第一句は希望を暗示しているのだろう。初心の良さと大胆さがある。失敗も成功も恐れず、素直な大胆さが作者の特徴にまで高まるには、不慣れな表現を改善する必要がある。

木村聡雄の俳句（評者＝古田嘉彦）

第六八号「カシミールまで続け穴倉高円寺」。第六八号は中央線の駅名を読み込んだ作品群。駅名と駅名以外の要素との関係を推測できる句もあり、多分その駅周辺のことを知らないからであろうが、わからない句もある。しかしむしろ分からずに、謎のままの方が自由に想像をめぐらせられて面白い。高円寺駅は多分今まで降りたことがない。どのような穴倉があるのだろうか。

夏石番矢の俳句（評者＝古田嘉彦）

第六八号「墨の海から私が生まれ君が泳ぐ」。第六九号「線路にテーブル人類は行方不明」。第七〇号「百人の天女が眠るその一字」。第七一号「夢から僕を風船とみる君は誰だ」。第七一号には、第七〇号から続く「黒い心臓」の句がある。悪夢のような心臓が第七一号でようやく縮まりながら透きとおるが、まだ悪夢は続いている。その中の一句。第六八号の作品と同じく二人が登場する句。このような対話の中で行われる句というのはあまり見ない。多様な形をとるダイナミックな夏石番矢の世界ならではのことだと思う。

夏石 すべてブログで書いた句。作者自身に手ごたえがある句を選んでくれた。

渡邊しゅういちの俳句（評者＝山本一太郎）

モダンさと、折り目正しさと。身軽さと、教養と。カタカナ語が多い印象。伝統を踏まえながら、形式にとらわれていない。第六八号「秋高しサンドイッチとパンの耳」。わかりやすい単語の組み合わせだが、推測が必要。秋の空とサンドイッチとパンの耳に、二等辺三角形のような距離を感じる。第六九号「熱爛でスタンダードもチャーホフも」。熱爛といえば日本酒。日本人である自分と外国の作家をつなぐものは熱爛？ 熱爛には変圧器か翻訳機のような役割があるのだろうか。

夏石 第七一号「玉虫の虹の糞なら媚薬とす」が、自由なスケベさが出ていい。

続いて、俳句翻訳と海外の俳句について、夏石代表を中心に合評。

夏石 モハメド・ベニス はモロッコの伝統と闘ってきて、いまはモロッコ第一の詩人。フランスでも活発にフランス語で詩を出版。フランス本土はそれまでの詩の歴史から抜け出せない停滞がある。

第六九号、フランスのジャン・アントニーニの俳句には、フランス農民の現在の苦悩がある。

第七〇号、モハメドベニスの「Journal du sang／血の日記」と題した句。次の句。

le sang reste a place
La ville reste a sa place
Les portes sont perdues

血はその場所に
都市はその場所に
すべての戸口は失せた

最初の二行の対句のあとに、飛躍の大きい切れがある。どんでん返し。海外の俳人

で一番レベルの高い俳句を作っているのはモハメド・ベニスだろう。

第七一号、リトアニアのユリウス・ケレラスは展開が明確な五句。

I open a book
to the moth's dry cocoon
words are alive

蛾のかわいた繭に

本を開く

ことばは生きている

暗示的な句。音節の数が少ない。

第七一号、モロッコのサメ・ダルウィッシュは次の句がいい。

For a moment,
both the peacock and his shadow
bright coloured

しばし

孔雀とその影

明るい色に

続いて、「吟遊俳句賞二〇一六」と「吟遊・夏石番矢賞二〇一六」の授賞式。吟遊俳句賞二〇一六は伊丹三樹彦、フランスのジョルジュ・フリーデングラフト。吟遊・夏石番矢賞二〇一六は古田嘉彦。夏石代表から賞状、賞金、賞品が手渡された。

集合写真撮影の後、午後五時すぎからはグリーンホール地下のレストラン・サンイチで懇親会。日本大学准教授の山岸竜治も参加。伊丹啓子さんも含め、各自俳句朗読。

参照

吟遊秀句抄 2016

http://banyahaiku.at.webry.info/201608/article_39.html

第19回吟遊総会アルバム

<http://webryalbum.biglobe.ne.jp/myalbum/200802900ab8b7b9f06801f1142ffab118c63f430/085912410965542741>